

【①表現内容—B：材料・素材】

■早すぎる光の芸術の終焉

—フィルムと印画紙を使い続けたい—

私が一番よく使うカメラはデジタル一眼レフです。多機能でランニングコストも安く、実に有能であるからです。しかし、安心して使っているかという点、そうではありません。デジカメの特性である、いろいろな条件をカバーして破綻なく写してしまうことと、画像をパソコンに取り込むとさらなる変身が可能になることに不安を抱きながら使っているのです。「これで細やかな感性が育つのか」とつぶやきながらです。

端的な例は明るさの幅です。少々暗く写っていても十分に明るくすることも、その逆も簡単にできることは周知の通りです。それでは光へのデリカシーは育つはずがないと思います。その点は、融通のききにくいフィルムカメラのほうが優れているでしょう。失敗する恐れと縁が切れないからこそ、対象への向かい方が鋭敏になっていくということは、あり得るのです。

子どもたちの教材に最適な素材にインスタント・フィルム（ポラロイド）がありました。写すと、「ジー」という音がして印画紙がカメラから出てきて、徐々に画像が浮かび上がってくる仕掛けのものです。像が浮かび上がってくる神秘性には誰もが引きつけられたものです。そこにはまぎれもなく光が蓄えられていたのです。

デジタル技術の確立は「光」から「記憶」へと基軸を移行させています。しかし、文化史全体の長さからすれば、印象派の絵画から光と色彩への自覚的・実験的にかかわりが始まったように、光への取り組みは実はそんなに歴史の長いことでもないのです。にもかかわらず光の申し子といってよい銀塩写真がその終焉を迎えさせられようとしています。

私は、まだメディアとして「青年期」にあるかもしれない近代の写真術が置かれている状況が残念でなりません。少しでもフィルムと印画紙を買って抵抗をしたいものです。

しばたかずとよ
(柴田和豊：東京学芸大学教授)